



ショートコメント

★★★★

Data 2021-133

監督・脚本：春本雄二郎
 出演：瀧内公美／河合優美／
 梅田誠弘／松浦祐也
 ／和田光沙／池田良
 ／木村知貴／前原滉
 ／河野宏紀／根矢涼
 香／川瀬陽太／丘み
 つ子／光石研

由宇子の天秤

2020年／日本映画
 配給：ピタース・エンド／153分

2021（令和3）年10月7日鑑賞

シネ・リーブル梅田

👁️👁️ みどころ

“自由と正義”を表現する「ひまわり」をかたどった弁護士バッジ（記章）の「天秤」には“公正と平等”が乗っているが、由宇子の天秤はいかに？

私の大好きな女優、瀧内公美がヌードを完全に封印し、社会派ドキュメンタリー作家として、“硬質感”たっぷりで製作に臨む、“女子高生いじめ自殺事件の真相”とは？

私は常に正義の側に！そんなことをシャーシャーと言う奴の天秤は怪しいものだが・・・

——*——*——*——*——*——*——*——*——*——*——*——*——*——*——*——

◆『彼女の人生は間違いじゃない』（17年）（『シネマ40』272頁）のデリヘル嬢役で少し注目され、『火口の2人』（19年）（『シネマ45』219頁）の大胆な脱ぎっぷりで大きく注目された女優、瀧内公美が、本作ではヌードを完全に封印。3年前に、とある地方都市で起きた“女子高生いじめ自殺事件”を巡るドキュメンタリーディレクター・木下由宇子役で、153分間出ずっぱりの熱演を！これは必見！弁護士の仕事を象徴するのは弁護士記章（弁護士バッジ）だが、そのモチーフはひまわりと天秤。バッジをかたどっているひまわりは、“自由”と“正義”、そして、その天秤に乗るのは、“公正”と“平等”だ。しかして、女子高生の自殺の原因は？学校内でのいじめの存在は？男性講師との交際関係は？講師の自殺との関係は？これらの取材を進めている“由宇子の天秤”はいかに？

自殺した講師の傍には、「自殺によって、学校や社会に対して自分の潔白を訴える」と書かれた遺書があったから、由宇子はその点にポイントをしばって取材中だ。そのため、由宇子とプロデューサーの富山（川瀬陽太）は、保守的なテレビ局の上層部との対立を繰り返しながら、概ねその遺書の線に沿った形で番組制作を目指し全力を傾注していたが・・・。

◆本作は監督、脚本、編集、プロデュースの4役を兼ねる春本雄二郎の渾身の力作。それが153分の長尺になったのは、そんな“本筋”と並行して、由宇子の父親である木村政

志（光石研）が経営する学習塾の新入生、小畑萌（めい）（河合優実）をめぐる、思いもかけない“衝撃の事実”が提起され、由宇子が必然的にそれに巻き込まれていくためだ。本職がメチャ忙しい由宇子が学習塾でもできる限り父親を手伝っていたのは立派だが、萌には一体どんな問題が？由宇子があまり成績の良くない萌の個人指導（？）をしている中で、萌から受けた“衝撃の告白”とは？

由宇子はいつも富山から「何を青臭いことを言っているんだ」と言われていたが、私は自分の天秤を明確にもっている由宇子が決して青臭いとは思わない。ただ、由宇子のディレクターとしての仕事ぶりはほとんど“硬質”だから、そこが気になるところだ。他方、由宇子は萌との関係では、女らしい優しさも見せるから、そこは面白い。もっとも、本作ではそのことが由宇子の“甘さ”になってしまい、そのため、“由宇子の天秤”そのものが危うくなってしまふのだが・・・。

◆2020年9月に完成した本作はさまざまな映画祭でさまざまな賞を受けており、その社会問題提起性は強い。私は春本監督が本作にかけたそんな意欲や問題意識を高く評価している。また由宇子の硬質な演技もグッド。しかし、その脚本に、私は次の2点で大きな疑問がある。その第1は、なぜ萌が塾に通っているのかということ。萌の父親・小畑哲也（梅田誠弘）はどう見ても父親失格と言わざるを得ず、父娘間の会話もゼロなのに、なぜ萌は義務教育だけでなく、塾にも通っているの？女子高生いじめ自殺事件を追っている由宇子が、それと同じような事件に出会う中で、“由宇子の天秤”がどうなるのかを描きたいことは十分わかるものの、この設定はいかがなもの？

疑問の第2は、妊娠した萌の父親は誰？という疑問が完全に欠けていること。本作では、ラスト近くになって、由宇子は塾生の男子から萌が“ウリ”をしていたことを聞かされるが、そんなことを言われなくても、男はひょっとして・・・と考えるのが当然だ。それと同じ意味で、「妊娠の相手だ」と名指しされた由宇子の父親・政志は、なぜ盲目的にそれを信じてしまったの？普通の男ならだれでも「本当に俺の子供？」「萌には、俺の他にも男がいたのでは？」と考えるはずだ。弁護士の私なら当然、萌の説明の信憑性を疑うが、政志はもとより、ドキュメンタリーディレクターを職業としている由宇子も萌をまったく疑わず、鵜呑みにしているという脚本は如何なもの・・・？

◆由宇子は本筋の女子高生いじめ自殺事件の取材についても、自殺した講師・矢野和之（前原滉）の母親・登志子（丘みつ子）や姉・志帆（和田光沙）の証言の信憑性を全くチェックしていないからアレレ？本作ラストの“大どんでん返し”は一見意外だが、それは、“由宇子の天秤”の甘さを考えれば、ある意味必然かも？2021年8月末に起きた米軍のアフガニスタンからの撤退に伴う大混乱について、バイデン大統領は「トランプ前政権が決めたことだ」と弁解しているが、それはおかしいのでは？それと同じように、私は本作に見る由宇子の天秤は少しズレていると思うのだが・・・。

2021（令和3）年10月15日記